

呂怡屏

1. 事業実施の目的

平成 28 年 7 月に、申請者はミラノで開催される ICOM General Conference における Committee for Education and Cultural Action (CECA) の年会でポスター発表をおこなう。

発表の題目は「Promoting Cultural Continuity through Revitalizing Museum Collections—A Case Study of Collaboration between Museum of Xiaolin Pinpu Indigenous People and their Community in Taiwan」である。

2. 実施場所

ミラノの 2016 ICOM General Conference 会場——MiCo (Milano Congressi, Piazzale Carlo Magno, 120149 Milano, Italy)

3. 実施期日

平成 28 年 7 月 1 日 (金) から 7 月 11 日 (月)

4. 成果報告

●事業の概要

今回の学生派遣事業の要務は、平成 27 年度のフィールド調査で得られた資料を ICOM (International Council of Museums ; 国際博物館会議) の大会における CECA(International Committee for Education and Cultural Action) 委員会のポスターセッションで発表することであった。

2016 年の ICOM 会議のメインテーマは「Cultural Landscape 文化景観」である。ICOM の Code of Ethics for Museums(2004) により、博物館は自然と文化的遺産の保存・解釈に力を添えるべき機構である。この考え方を踏まえて、本大会では文化的、自然的な要素を含む文化景観をテーマにして、議論を展開した。特に文化と自然を解釈するため、博物館がどのようにコミュニティーにおける活動の中心地になるのか、博物館の内外に存在する文化遺産と知識をどのように守るのか、および文化景観の持続性が議題としてとりあげられた。

今回の大会では、文化遺産の保護という大きな枠組みから、シリアにおけるパルミラ (Palmyra) 遺跡のベル神殿の破壊とともに、身をささげた研究者を記念する「Museums and Cultural Landscapes」(博物館と文化景観) という記念講演が開かれた。同セッションで発表した研究者たちは ICOM の社会的責任を改めて考証し、現在さまざまな問題を抱えている社会における、博物館の運営とこれからの取り組みにつき、新たな提言をおこなった。まず、博物館とコミュニティー、博物館と所在地の住民との関係が再考されるべきものとして提示された。文化遺産を維持するため、文化遺産に関する保護・創造・体験・解釈の循環を築くことが重要視された。続いて、博物館という建築の壁を越えて、キュレーターと研究者はより広い範囲のより多様な主体に注目し、新たな社会的課題に取り組まなければならないという点が強調された。(講演者は Bernice L. Murphy と Rev Rivard)

また、民族学の収蔵品と民族学博物館に関するセッションにも参加した。同セッションのトピックは2つある。1つは民族学博物館の展示リニューアルを事例にして、いくつかの展示手法の試みから、新たな異文化展示の方法が示された。この展示手法を通じて、展示を企画する際に、誰のために・何を展示するのが改めて問われた。もう1つは、収蔵品の写真を展覧会の形で現地の人びとに示した事例が紹介された。収蔵資料の活用を通じて、博物館と現地社会と交流・対話ができることが示された。

申請者はICOM会議のOFF-SITE Meetingにおいて、MUDEC (Museum dell Culture)の新しくできた常設展示を見学した。MUDECは内省的な常設展示を企画することを通じて、21世紀の民族学博物館が持つべき1つの視点を示した。また、同館で開催したICME (International Committee for Museums and Collections of Ethnography)の会議で、移民と難民など博物館と人権に関する問題も提起された。急激に変化する21世紀の社会状況に応じて、博物館が考えなければならない課題、および負うべき社会的責任は何かという問いが研究者たちにつけられた。

●学会発表について

今回のCECA委員会は博物館の収蔵品と地元コミュニティとのつながりを念頭に置いて、収蔵品の知識を伝承すること、および博物館内外の文化遺産を保護することをテーマの中心軸にした。したがって、申請者の今回の発表のテーマは、「Promoting Cultural Continuity through Revitalizing Museum Collections——A Case Study of Collaboration between Museum of Xiaolin Pinpu Indigenous People and their Community in Taiwan」(博物館収蔵資料の活用と文化の持続的発展——台湾の小林平埔族群博物館とソースコミュニティの協働を事例に)であった。

発表の内容は、博物館の刺繍に関する収蔵資料を活用する動きに焦点を当て、文化復興の際に博物館に収蔵された資料が果たした役割を説明することであった。特に教育活動を通じて、収蔵品が活用されるとともに、台湾原住民族のタブロン人の刺繍工芸が再興され、また民族的アイデンティティの主張も促進されるようになったことを指摘した。

質疑においては、主に博物館の収蔵資料を活用する際の主体がだれかという質問があった。刺繍を教える人は当該民族の人なのか、学んだ人は村人だけなのか、どんな刺繍技法が教えられたのかなどの質問がでた。もう一つ質問が多かったのは、刺繍という工芸の伝承における連続性、および現代において創造性についてであった。その質問にたいして、申請者は近年の刺繍の伝承方法と変化の傾向を説明した。博物館の常設展示における刺繍布の出展とタブロン式刺繍の図録の出版は五里埔と日光小林村で伝統の刺繍を再興するきっかけになった。最初に、刺繍を教える人は他の民族の原住民で、刺繍技法にクロスステッチを使った。本発表に取り上げた2015年の連携事例ではそうだったが、今年実施した講習では、タブロン人の講師を招いて、タブロン式の刺繍技法を復元しようと試みた。このような実施方法の変化の中には、タブロン人自らの文化伝承に関する考え方の変化が反映されていると思われる。また、今年は講習を始めてまだ二年目なので、刺繍工芸と伝統との関わりは今後観察し続けるポイントと考えられる。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業を実施したことによって、申請者は現在世界各地の博物館、とくに民族学博物館が直面しているさまざまな課題について、実践の結果と研究の方向を把握することができた。個人のポスター発表により、国際的な学术交流とディスカッションができて、今回の発表テーマに関して今後の研究の掘り下げるべき点に関する示唆を得た。

また、既存の文化景観の保護をより有効に進めていくこと、長期的な博物館と社会との相互関係を築くこと、それに基づいて博物館外の文化景観が生み出されること、といったさまざまな視点に接することができた。それにより、これからの調査はより広い視野で取り組んでいくことができると考えられる。

●本事業について

博物館は社会教育の機関であり、文化遺産を研究・保護・活用する拠点でもある。一方、博物館人類学という研究分野は、人類学の視点や調査手法に基づき、様々な博物館における事例を考察し、その課題と可能性を探求する学問である。研究をより一層進めるため、研究者とキュレーターにとって、博物館に関する多くの研究成果に接すること、そして、博物館という実践の場所でより多くの経験を積むことが、専門知識を積み重ねていく際の不可欠な要素だと考えられる。そのため、この度申請者は学生派遣事業に参加し、世界各地の博物館の実践状況と文化遺産活用に関する最新研究動向を把握することができ、とても有益であったと思う。